

# 遙かなる風雪

実録・柴田音吉洋服店

19

## 憧れの自転車——柴田には5台あった

昭和初年の柴田家。後列右が二代目音吉、前列に弟三三さん(現社長)を抱いた高明さん(現社長)



大正後期から昭和初年にかけての服地卸商の商いは、発行見本での単品売りと、10ヤード単位のまとめ売りの2通りで行なわれた。

まとめ売りは値引きされたが、かなりの財力のある洋服店でなければ扱える額ではなく、取引数も少なかった。発行見本は現在でも用いられているいわゆるマス見本の形式である。これが商いの大半を占めた。

ラシヤ商と洋服屋の間にブローカーがいたのもこの時代の特色である。

彼らは各ラシヤ商の発行見本を預って洋服屋に配る。洋服屋はその見本を見てブローカーに注文し、ブローカーはラシヤ商との仲介の役をつとめた。当時はラシヤ商の力が強く、これらブローカーは十分存在価値があったようだ。

舶来服地の仕入れは2通りの方法がとられていた。

英国産地からの直輸入の形

をとるところ、外国商館から買い入れるところであり、両者並行の店もあった。

輸入事務はいまほど煩雑ではなく比較的小きなラシヤ商でも銀行に行って信用状を開き、わずかな手数料を払って代理店を通じての仕入れができた。

× ×

昭和初期、これらラシヤ商

の外交員の足、のひとつに自転車があった。まあまあのラシヤ商で1台。大阪の慶岡には10台近くあった。柴田にはこのころ5台。新入りは乗せてもらえず、2～3年経って初めて乗ることが出来たのである。現在の自動車に匹敵するくらいの高級な乗り物だった。

石垣青年は2年辛抱したら自転車を買ってやると音吉にいわれ小おどりして喜んだ。

夢に見る自転車は外国製のパーソン。これは200円もする最高級品だった。2年経ち買ってもらったのは90円の中級

品。夢破れはしたものの銀輪をころがす味は格別だった。

田中治三郎さんの少年時代の夢のひとつもこの自転車。だったというから、現代青年の自動車礼讃とあまり変ってはいないようだ。

その後国産自転車の急成長によって、昭和9年ごろには1台16円くらいになり、自転車は庶民の足と化した。

× ×

自転車で行けぬところへは汽車の旅が主だった。

中国、九州路は臼井青年の主な出張先だったが、10日のうち旅館に泊るのはわずか3泊、あとは夜行列車での旅である。

広島1軒、下関3軒、門司1軒と辿ってゆく商いが鹿児島まで続く。鹿児島では言葉

が全く通じず、教科書を習い覚えた小学生の子供を\*通訳。として商売をしたこともあった。

北海道、東北への商いは東京支店から行った。

このころにはもう営業部員はすべて背広を着用している。最初の2年はお仕着せ。3年めからは生地は原価の1割で扱い商品の中から買い、洋服部が仕立ててくれた。

65円で売られる洋服を、18円で着ることができたから、彼らの身なりはいつもりゅうとしていた。もっともあまり派手な柄行きものは許可が下りなかったらしい。(つづく)

岡 和子記者